

心みじかの春の山風

細野 哲弘

独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

私は父に可愛がられてわがまま放題に育った娘でございましたが、貴方との出会いは何にも代えがたい僥倖^{しあわせ}でございました。

貴方がまだ鶴千代という名の人質¹⁾として初めて岐阜のお城に来られた時、父信長は「こやつは、いづれ一廉^{ひとかど}の武将となり、織田の屋台骨を支える者になる」と一目で気に入って、私を娶^{めあ}わせてくれました。その見立ては違わず、貴方のどんな困難にも立ち向かう忠勤ぶりは、誠に天晴れでした。

貴方が父を尊崇していることは言葉や態度の端々に進^{ほとばし}っていましたが、「妻となった身には、その娘というだけに見られることはあまり嬉しいことではないのですよ」と申し上げたら、「そうか、それはすまなんだ」と微笑^{ほほえ}んで、以後一人^{おなご}の女人として私を大層優しく慈^{いつく}しんでくださいました。

そんな貴方が、ある日突然、洗礼を受けてキリシタンになられたのには大層驚きました。一体何があったのでございましょうか。

貴方のことは、父が急に嫁に行けと言いつつまでよく存じませなんだ。あれは永禄12年(1569年)の暮れのことでした。その少し前に大河内城の戦い²⁾

があって、そこで貴方は初陣に臨^{のぞ}まれたと伺いました。その折に貴方は、介添えの武将が見失うほどの乱戦の中、敵の兜首^{かぶとくび}を挙げるとい^{おおてがら}う殊勲^{うちあわび}を挙げられたとの由³⁾。父が大層喜び、その場で打鮑^{うちあわび}を下賜^{さげわた}しただけでなく、珍しく自ら烏帽子親^{えぼしおや}を買って出て、父の小姓でいらした貴方の元服をしたということ、そ



蒲生氏郷像 (ウィキペディアより)

- 1) 稲葉山城(岐阜城)の麓(ふもと)の最初の入り口近くに3つの大広間があり、そこに若者が100人ほど詰めていた。いずれも各地の同盟者からの人質であった。信長は人質を単に抑留し、無為に閉じ込めておくようなことはしなかった。こまごまとした用事を言いつけては人物吟味をした。とある日、人質の少年たちに、美濃斎藤家から織田家に臣従した稲葉一鉄が自らの武勇伝を話して聞かせるという折があった。その時、目を爛々(らんらん)とさせて聞き入る鶴千代の態度が稲葉をいたく感心させ、それが稲葉から信長に取り次がれてより、信長の琴線に触れる「お気に入り」となった。
- 2) 大河内城の戦いとは、1569年信長が南伊勢を支配する北畠氏が籠る大河内城を攻略せんと仕掛けた戦い。戦いは一進一退のまま膠着(こうちやく)し、最終的には信長の次男茶筌丸(ちやせんまる:のちの信雄)を北畠具教(きたばたけともりの)の婿養子で入れることで妥協が図られた。信雄は北畠家に入ったのち田丸城を伊勢支配の拠点とし、大河内城は廃城となった。
- 3) 当時の初陣にはベテランの武士が介添えにつき、その補助によって手柄を挙げさせて縁起の祝い事とするのが習わしであった。鶴千代の初陣には、種村伝左衛門(信長からの寄騎)と結解十郎兵衛(賢秀からの寄騎)が介添えで付き、万全の態勢をとったが、この戦は織田方の大苦戦であった。混乱の中で陣を崩され、介添えとも離れ離れとなり、一騎猛然と敵陣に突っ込んだ鶴千代は行方不明になる有様であった。そうと気付いて賢秀はじめ介添えらが色をなして探すところに、鶴千代は血みどろになりながらも敵将日置日向守の首級を引提(ひっさ)げて帰陣した。日置は北畠麾下(きか)の名だたる豪傑として織田側にも聞こえた武将であり、全体として苦戦であっただけに、これを討った鶴千代の働きは格別の光芒を放った。



近江周辺勢力図 (1560 - 80年頃)

して鶴千代から忠三郎賦秀⁴⁾に名乗りを改めさせたことも後から伺いました。

その後、なにやら御台所様(父正室濃姫様)が慌ただしくしておられるなど思っておりましたら、実は私の婚礼準備でございました。

初めてお会いした時のことは、今でもはっきりと思い出すことができます。初陣でお手柄を挙げられた貴方と貴方の父上様が岐阜のお城に来られて、その貴方に向かって父が急に「此度の褒美に、この娘をお前にやる」と言い出して、貴方は吃驚しておられましたね。暫く言葉の出なかった貴方に「なんだ、俺の婿では不足か」と質す父の言い様は、すぐに答えが欲しいだけで、悪気はないんですよ。いつものことなんです。

私はその時まで12歳。鬢削ぎ(少女の元服式)すら済ませていないままごとのような夫婦ではありませんでした。でも、夫婦になったとたんに、貴方にお舅様・賢秀様の日野の居城⁵⁾に帰っても構わないとまで父が言うのは、余程貴方のことを信頼している証だと直ぐに了見いたしました。

岐阜から日野までの輿入の道中の間、二人並んで馬に揺られましたのはお転婆でしたかしら。信長の娘として馬には馴れておりましたし、初めて会う領民がどんな顔をして迎えてくれるかを直接に知ることに興味がございました。そして、なにより輿の中では、馬に乗る貴方がどんなご様子なのか、どんな眼差を私に向けて戴けるのか分かりませんものね。

日野のお城での生活は楽しいものでしたが、父信長は引き続き戦いに明け暮れ、貴方も織田方の少壮武将として各地に転戦の日々でありました。私には戦いのことは分かりませぬが、徐々に増えていく家臣の統率には随分と気を使っておられたことは存じておりました。常に先陣を駆ける貴方の鯰尾の兜は、断然目を引きました。敵軍から格好的にならないかと、私は密かに案じておりましたのよ。でも、むしろ「ここに吾あり。皆もこの鯰尾の銀の兜に続け。」と味方の家臣に呼び掛けて、皆を鼓舞することが狙いでございましたね。浅井、朝倉との戦い、長島一向宗との攻防、長篠の戦でも、細長い銀の兜は勇躍して陣頭にあったと伺っております。



鯰尾の兜 (ウィキペディアより)

4) 鶴千代は、元服を機に信長の命で、忠三郎賦秀(やすひで)と名乗った。忠は当時弾正忠だった信長の官名からのものである。因みに、鶴千代の1才年下の信長嫡男の奇妙丸も同時に元服し、上総介信忠と名乗った。
5) 日野城は、鶴千代の祖父に当たる蒲生定秀が築いたもので、中野城ともいう。鶴千代はここで生まれ育った。当時六角氏の傘下にあった蒲生家は父賢秀の頃に信長と敵対したが、和睦により信長に臣従することとなり、その証(あかし)に鶴千代を人質に出した。

暫くして、^{こしがぬけるほど}驚天動地の大事件が起きました。父が京の本能寺で明智光秀の^{むほん}逆心により、よもやの討ち死にを遂げてしまったのです。あの時、^{ちちうえ}舅様は安土城の留守居役でしたが、親子の連携はさすがでございました。

皆が^{あわてふためいて}慌て動揺して右往左往する中で、貴方は冷静に舅様と連絡をおとりになりつつ、輿50挺、鞍を置いた馬100匹、荷物を引く馬200匹を用意して、日野のお城から500の軍勢とともに安土城に向かってくださいました。こうした用意が、安土の城にあった御台所様はじめ遺族の女衆、子供たち、お付きの者を運ぶのに、^{すみ}どんなにか役立ったことでしょう。安土の城からの^{すみ}速やかな撤収により、皆様が無事に日野のお城にお着きになったのを見て、私は涙が止まりませんでした。光秀からは再三にわたり遺族の引き渡しを迫る使者が参りましたが、信長の婿がそんな話に乗るとでも思ったのでしょうか。なんとこのう、味方を増やせぬ逆賊光秀の焦りが垣間見える思いでございました。

そのあとの山崎の戦い、織田の跡目争い、賤ヶ岳の戦いなど、事態は短い間に、めまぐるしく動きまわりました。光秀が山崎で落ち武者狩りによりあえなく最期を遂げたあと、貴方は兄の^{のぶかつ}信雄とともに上洛し筑前守秀吉と対面されましたね。筑前守秀吉から、父遺族救出の際の^{きくばりのあるおちついた}周到沈着な措置を褒めたたえられた

貴方は、光秀の領していた近江の地に5千石を新たに与えられました。

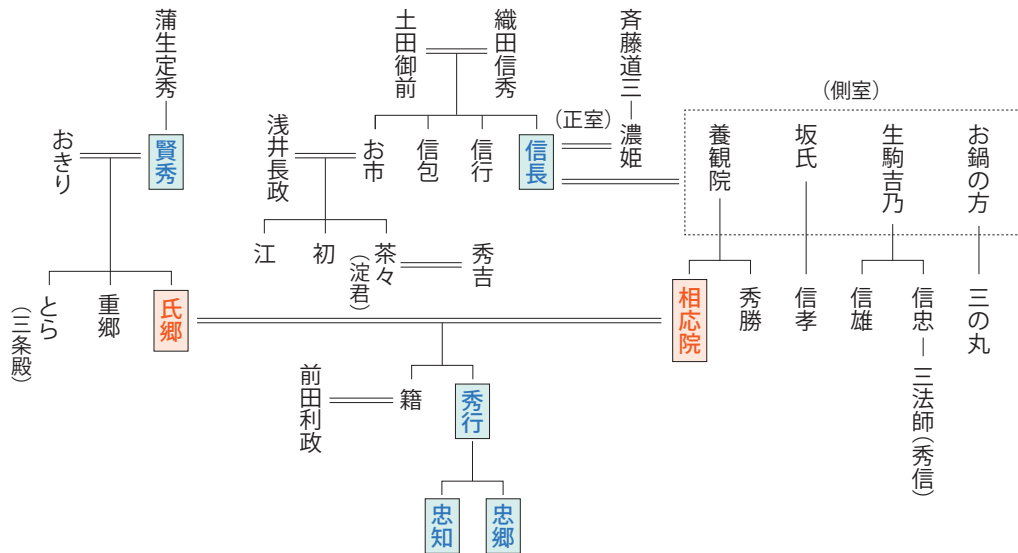
加増のあったことは^{めでたいことと}祝着に存じ上げますが、私はなにやら秀吉の振る舞いが気に入りませんでした。一体いつから秀吉はそのような差配のできる立場になったのでございましょうか。その上あろうことか、^{よりにもよつて}想像を絶して貴方との誼を深めたいと称して、貴方の妹とら殿（のちの三条殿）を側室に欲しいのだと言^{よこ}い寄越しました。とら殿がこれを受けられたのも驚きでしたが、秀吉如きが貴方と義兄弟となったこと、したがって私とも義姉弟となってしまったことの方が^{こころふさ}余程心塞がる思いでした。

そうですとも、私は秀吉が嫌いでございます。大っ嫌いでございますとも。

筑前守秀吉は、確かに備中高松から^{またたくまに}電光石火引き返し光秀を滅ぼしたかもしれませぬが、直接討つたのは落ち武者狩りの農民ですし、兄信孝はじめ多くの方が光秀討伐に立ち向かってくださったのです。私には、秀吉の行動は主君の^{あだ}仇を討つというより、この機に乗じて天下を狙うという野心に発したものであり、兄の^{のぶかつ}信雄、信孝や柴田様、丹羽様をはじめとする宿老を差し置いて、まるで父信長の^{あとがま}後継のように振舞ったことに得心がゆきませんでした。織田家の相続に介入したかと思えば、時を移さず柴田様



本能寺の変・山崎合戦直後の勢力図



相応院関係系図

を滅ぼし、伯母上お市の方様や兄信孝をも自害⁶⁾に追いやった秀吉の所業を思うとき、私の胸は張り裂けそうでした。あの足軽上がりの秀吉が宿老、同輩を己に臣従させ領地を差配するなどというのには、我慢ができませんだ。

貴方は、「筑前殿こそ信長様宿願の天下布武を成し遂げられる器量の持ち主」と秀吉を評しておられましたが、戦い方の薫陶を受けた恩ある柴田様⁷⁾や兄信孝を攻める側に、貴方が加わるのが信じられない思いでした。さらに、徳川家康様が秀吉とぶつかられた小牧・長久手の戦いの折は、貴方は伊勢の戦線にお出かけでした。でも、北伊勢は兄信雄の支配する地であり、いかに信雄が徳川方であったとはいえ、義兄弟の兄信雄に貴方が敵対するという知らせに接することは、私にはとても辛いことでした。貴方の本心はどんなだったのでしょうか。秀吉と兄信雄という二人の義兄弟の間で困ったようなお顔の貴方に、憤懣やる方のなかった私は辛く当たりすぎたかもしれませぬ。

そんな心棘々^{こころざきざき}おり、天正11年(1582年)冬に私た

ちに待望の男の児^{こゝろ}(のちの秀行)が生まれたことは、一条の光であり安らぎでございました。貴方もことのほか喜ばれ、早速に自らの幼名と同じ鶴千代と名付けてくださいました。私は貴方の嬉しそうなお顔



松ヶ島城址(松坂市 今は畑の中の小高い丘になっており、探し当てるのに随分と手こずった)

6) お市の方は北の庄で再嫁した夫柴田勝家とともに運命を共にしたのであるが、信長の三男・信孝の自害には経緯(いきさつ)がある。信孝は鈴鹿の神戸家に養子に出されて、神戸家の当主になったが、本能寺の変のあと、変に斃(たお)れた長男信忠の所領であった美濃一国と岐阜城を引き継いだ。その後、清須会議により織田家の跡目とされた信忠嫡男の三法師を擁して政局の主導権を握らんと画した。これを清州会議の合意違反として秀吉に咎められ城を包囲されたため、三法師を引き渡し、母と妻を人質にして一旦は和睦した。その後、滝川一益が反秀吉の兵をあげたのに呼応して反旗を翻したが果たせず、尾張知多郡の野間(現美浜町)の内海大御堂寺(野間大坊)に移され、その地で自害を強いられた。この地は、かつて源頼朝の父義朝が平治の乱に敗れてこの地に落ち延びたところ、騙されて最期を遂げた処である。信孝の辞世の句と伝わる「むかしより 主をうつみの 野間なれば むくいを待てや 羽柴ちくぜん」はそれを表したものとされているが、句の趣向の悪さから見ても後世の創作であろう。

7) 日野城に戻った後、忠三郎賦秀は柴田勝家の麾下に組み入れられ、勝家の薫陶を受けながら、各地を転戦し戦の経験を積んだ。

を拝見しながら、この児は決して秀吉なんぞの風下に立つようなことのないよう、秘かに祈ったものでございました。

私の想いに拘わらず、秀吉は栄華の道を極めていきました。貴方の有力武将としての働きは秀吉の栄達にも大いに寄与したことでしょう。でも、いつの頃からでしょう、貴方が遠くを見るように視線を泳がせるようになられたのは……。

小牧・長久手の戦いののち、貴方は伊勢の平定に功ありとされて、伊勢松ヶ島の地に12万石で封じられました。秀吉はその後関白という至高の位に上り詰め、ちょうどそれと同じ時期でしたね、貴方が「賦



松坂城址 (松坂市)



鶴ヶ城 (会津若松市)

秀という名前の秀が秀吉様と被り、しかも賦の下に秀を置くのは不遜」として、名乗りを氏郷に変えられたのは。

さらに時を経て小田原征伐が終着したあと、貴方はそれまでの度重なる武功を認められ、今度は会津黒川の地に42万石で封じられました⁸⁾。でも、この大抜擢にも拘わらず、貴方が人知れず悔し涙を流されたこと⁹⁾を私は存じております。軽輩上がりと雖も、権力の頂点にある秀吉との主従の間合いを自覚され、一連の出来事の中で、貴方は武将としての踏ん切りをつけられたように思われました。貴方の無念は私にとっての無念でもありました。

もともと貴方は、近江の土地柄と商いの感覚に格別のものをお感じになっておられました。父の楽市楽座も岐阜を除けば、近江でこそ華やいておりました。この地の物産を作る素地、ものの動き、天下に通じた事情の行きかひのさま、そして何よりも天下に号令するに父がこの地を選んだ理の所以を貴方はよくご存じでありました¹⁰⁾。それをかなぐり捨てるように、会津に赴かれる貴方の後ろ姿には、哀愁さえ漂っておりました。

貴方の武将としての志を知るにつけ、沈痛悲嘆な思いを禁じえませんでした。妻としてはもっと心配なことがございました。会津に転封されるまで、秀吉は貴方を酷使し、私はなかなか貴方と一緒に過ごす時間を取れなくなっておりました。貴方が決して手を抜かないことを承知で、戦いはもとより、華やかではあるが民の負担を強いるだけのように思われる普請などにも、秀吉は貴方を駆り出されました。

貴方と私の生活を壊し、貴方の体を蝕ませた秀吉を、私は恨まないではいられませぬ。

とりわけ苦痕を覚えましたのは、秀吉の高山右近

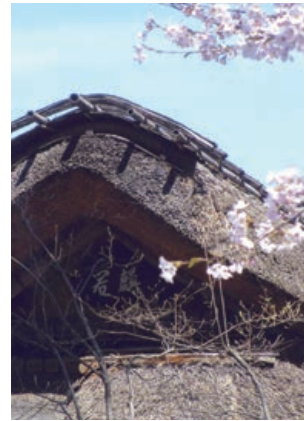
- 8) 氏郷は会津黒川の地を会津若松と改め、城には自らの幼名から鶴の字を当てて鶴ヶ城となした。その前の伊勢での街づくりでも松坂という地名を採用しており、「松」という字に嗜好(おもいいれ)があったと思われる。
- 9) 小田原を平定した後の奥州への睨(にら)みという意味で、会津に誰を置くかは重要な判断であった。当初、細川忠興を起用するという案もあったようだが、秀吉は氏郷を選んだ。その力量を評価してのことではあるが、寧ろ旧主信長をも唸らせたその器量ゆえに「上方から遠ざけるべし」との思惑が秀吉にあったのは想像に難くない(「名将言行録」)。また、氏郷においてもまさに鏡の表裏のような感慨があった。江戸中期に編纂された「常山紀談」という事実関係中心の逸話集に依れば、会津転封の沙汰を得た氏郷が「たとえ小国でも西国にさえ居れば、武功の果たし甲斐、次への発展の余地があるものを、辺境ではいかんともしがたい」と悲嘆した旨の記述がある。なお、42万石とされた会津の石高は、その後仙台領との入れ替え、検地などを経て、91万石となった。
- 10) 童門冬二の「小説 蒲生氏郷」は、近江の商業/経済的先進性がいかに氏郷の成長にかかわったかという観点から彼の一代記を綴ったもの。

様、千利休様への^{むご}惨い仕打ち、さらに会津転封以後の伊達政宗様との^{もめごと}確執を作り出した秀吉の仕切りについてでございました。

高山右近様¹¹⁾が熱心なキリシタンで、貴方にもその宗旨を説いて改宗を薦めた方であることは存じております。その教えの何が貴方の琴線に触れたのでございましょうか。神を最上の段階に置くというキリシタン世界のあり様は、貴方の中に芽生えた関白秀吉が絶対の存在であることへの反発、疑問を芽生えさせたのではないのでしょうか。新しいもの好きで自信の^{かたまり}権化のような父信長なら、笑い飛ばすようなその教理の立て付けは、成り上がりで^{ちっぽけ}狭隘な器量の秀吉には、自らを否定する恐ろしい悪魔の教えに思えたのかもしれないね。でも、ずっとあなたと親しくされていた右近様を、その宗旨や領内の寺社への不敬をことさらに^{ことあ}事挙げし、その領地を没収して追放するという秀吉のやり方が、貴方の^{こころのうち}内奥を大層苦しめたことは間違いのないことではございましてしょう。

また、右近様や細川忠興様などとともに貴方が師事¹²⁾された千利休様を、切腹という事態にまで追い込んだ秀吉の^{こころのありよう}存念は、想像を絶するものでした。利休様の透徹した教えと秀吉の処世との交わらない有りさまは、貴方にとっては武将として秀吉に臣従することの意味を改めて自問させることになったのではないのでしょうか。心の奥底のとても柔らかいところ、いつもは^{ふたを}封印して触れないようにしている問いに向き合うことが、貴方の胸のうちに一層のさざ波を^か掻き立てたであろうことは、容易に想像できます。利休様がお亡くなりになったあと、利休様のご次男少庵様を会津に^{かくま}匿われ、利休様の茶道の系譜を^つ繋がれたのは貴方らしい報恩でございました。

さらに、加増、昇格と称してなされた奥州への転



茶室 麟閣（会津若松市 鶴ヶ城の一角にある利休ゆかりの庵 氏郷は利休の次男少庵を盛り立てて千家の復興を支援した。その後、宗佐、宗室、家守の三人の子孫により、表、裏、武者小路の三つの千家が紡がれた。）

封ですが、会津の地はもともと政宗様所領の地でありました。秀吉はその地に貴方を封じ、そのあとの周辺一揆の始末についても政宗様の憎悪・反発が貴方に向くように差配しました¹³⁾。殿方の世界では^{よくあること}常の事かもしれませんが、双方の牽制を^{あお}煽りたて、政治の面でもお身体の面でも、貴方の消耗を強いるようになったことは、^{こころしお}心萎れる思いでございました。

その後、秀吉は気でも^{くる}違ったように、海を渡って朝鮮へ出兵することを全国の大名に命じ、貴方もはるばる会津から九州名護屋に兵を出されました。その途上、京でお迎えした貴方は^{やつ}お寝れになり顔色も悪く、すっかり^{しょうすい}憔悴された趣にて、九州にお見送りする私の胸は張り裂けんばかりでございました。そして貴方は長きにわたる疲弊に耐えかねて、とうとう陣中で発病し倒れておしまいになりました。陣中で病臥しながら、朝鮮の^{むご}無辜の民を苦しめるだけとしか思われぬ戦いのさまを、どんなお気持ちで

- 11) 高山右近は播磨の国に6万石で封じられていた大名であったが、秀吉の伴天連追放令（ばてれんついほうれい）ですべての所領、財産を捨て、信仰に生きることを選んだ。その判断自体も秀吉の怒りを買って、事実上の追放となるも、小西行長、前田利家の庇護（かくまい）を受けて世過ぎをした。追放の身ではあったが、小田原征伐にも内々に前田軍の一員として参加し、氏郷の臨終にも立ち会った。その後金沢で引き続き前田家中として諸事に活躍したが、徳川家康のキリシタン国外追放令が出るや、自ら金沢を出てマニラに送られ、1615年その地で没した。享年63歳。
- 12) 当時利休に茶道師事をした高弟を「利休七哲」という。蒲生氏郷を筆頭に、細川忠興（三斎）、古田織部、柴山監物、瀬田掃部、高山右近（南坊）、牧村兵部をさすが、七哲というのは後世の呼び習わしで、当時は七人衆と称した。利休が追放になる折、秀吉との関係を憚（はばか）って、ほとんど利休を見送る者がいない中、このうち細川忠興、古田織部の二人だけが別離を惜しんだという。なお、その時、氏郷は会津に居り、見送りはかなわなかった。
- 13) 秀吉による当時の奥州の仕置きは、政治的な徹底した伊達政宗牽制シフトであった。しかし、政宗が蘆名（あしな）氏を討って手に入れた会津の地を取り上げて氏郷に与えたことは、政宗のプライドをいたく傷つけた。さらに、小田原攻めに加わらなかったことを咎められて領地を失った小領主たちの不満を利用して、政宗は一揆（葛西大崎の一揆）を焚きつけたものの、秀吉の査定で不利な領地替えを強いられ、その利益が悉（ことごと）く氏郷に帰属したことも、政宗の怨みを氏郷に向かわせた。

覧になっていたことでしょう。その後、淀殿に御子（のちの秀頼様）が誕生され、それを機に秀吉も大阪に戻り、貴方も漸くに京まで戻っておいででした。

しかし、京の名医¹⁴⁾を挙げてのあらゆる手立ても空しく、ついに文禄4年（1595年）の2月、貴方は「秀行を頼む」と言いおいて、^{まかた}臉を閉じてしまわれました。まだ四十路に手が届かない若さでございました。貴方が詠まれた句を思い起こさずにはいられません。



蒲生氏郷墓所（会津若松市 興徳寺）



蒲生氏郷辞世の句碑（会津若松市 興徳寺 墓石の少し手前にある。）

限りあらば 吹かねど花は 散るものを 心みじかの春の山風

高山右近様が最後まで貴方の枕頭を離れず、貴方を看取っていたいただいたのが、わずかに慰めてございましたが、名護屋で臥されてから既に3年の年月が過ぎておりました。せめてもう少し早くお戻りになり手立てを講じることができていたならばと、涙が^{こぼ}零れてなりません¹⁵⁾。

秀吉というのは、我が意を通すことにどこまでも執着する異様な輩^{やから}でございました。貴方亡きあとの喪失感も癒えぬままに貴方のご葬儀を執り行い、元服させた秀行の家督相続^{やつのこと}も漸くに済ませたころ、こともあろうに、私にお召しがありました。秀吉には、もともと父の血筋をことさらに求めるところがありました。伯母上のお市の方様にご執心だったのは誰もが知るところでしたし、父の姪の淀殿、私の異腹妹の三の丸殿を身内に加え、私にまで……と思うと、その卑しくも^{いや}不知己な意図に^{みのほどしらず}慄然とする思いでございました。

しかし、まだ13歳の秀行、会津家中の先行きのことを思えば、無下に太閤からの申し渡しを拒むことはできません。思いを定めて伏見の城に参上することと致しましたが、肌を許すくらいなら死んだほうがましとの覚悟で、髪を下ろし、黒染めの袈裟をまとった尼の姿で目通りいたしました。それを見た秀吉の^{ぼうぜん}呆然とした顔を思い出すたびに、失笑を禁じえません。

もっとも、家督を継いだ秀行には、のちに宇都宮12万石に転封するとの沙汰が下りました。家中に混乱^{とが}があり、若い秀行の抑えが効かなかったことを咎められたのは致し方ないことでしたが、のちに関ヶ原^{おおいくさ}の大戦で秀行は見事に面目を施し旧恥^{そそ}を雪いでく

14) 京における氏郷の治療には、施薬院全宗の指揮のもと、曲直瀬玄明（まなせげんめい）、一鷗軒宗虎をはじめ当時の名だたる名医が拳（こぞ）って当たった。死因については、巷間、領地統治で日（いわく）のあった伊達政宗が奥州で毒物を盛ったとか、氏郷の器量を恐れた秀吉が密かに石田三成に命じて毒殺を目論んだとかの風説があるが、医師団の残したカルテに依れば、直腸がん、または肝臓がんの可能性が強いとされている。

15) 司馬遼太郎「街道をゆく—奥州白川・会津みち—」の中に、氏郷の墓について触れたところがある。「墓そのものは古風が保たれている。石垣の上に土を盛り、芝をうえてその上に堂々たる五重塔がすえられているのである。五輪には空・風・日・水・地と刻まれており姿もじつにいい。墓のそばに、辞世の歌碑がある。……」全くその通りの墓である。
なお、会津興徳寺の墓は遺髪を祀るもので、氏郷の墓は京都の大徳寺塔頭黄梅院にもある。大徳寺の墓は非公開だが、もともと信長が父信秀の供養のために創建したもので、織田家の人々の他に小早川隆景などの墓もある。

れたものの¹⁶⁾、私が伏見で秀吉の面目を傷つけたことが全く影響していないとは言えますまい。

あれから随分と時間^とが流れました。「昌林院殿前参議従三位高厳忠公大禪定門」と記されたあなたのお位牌の前で、一人物思い^{おぼ}に耽^ひっております。

私はキリシタン・レオン氏郷の妻でありながら、とうとうキリシタンにはなりません。貴方は伊勢の地に移られてから、松ヶ島から南に下った地を松坂と名付けられ、商人たちを松ヶ島から呼び集め、新しい城下町を作られました。大名の家族は聚楽第



相応院墓所
(京都市左京区百万遍 知恩寺瑞林院)

の中で住むようにお達しがあり、その新しい街づくりの様を私は目にすることはできませんでした。けれども、聚楽第で過ごすうち、同じ境遇の黒田孝高様ご令室様や小西行長様ご母堂様などとお近づきになり、キリシタンの教えや日常につき、親しくお話を伺うことができました。皆様大変清々^{すがすか}しい方々でした。神仏を信仰するだけの私でしたが、皆様の目に宿る安らかな光や、キリシタンは決して一夫一婦の制を破らないという教えは、深く心に残りました。

一人の殿御が沢山の側室を迎えることが珍しくないこの国において、この新しい信仰が夫人、娘に拘わらず女衆^{おなごしゅう}に、多く受け入れられたのも得心のゆくところでした。でも、貴方は側室を迎えるという素振り^{これっぽち}は微塵もなく、ずっと私を慈^{いつく}しんでくださいました。私にとって、改宗する必要は最初からございませんでした。

けれども、貴方がご奉公の中で人知れず悩み、口には出せない苦悩や虚しさを有^{なだ}め、心の安寧^{やすらぎ}を求めるためにキリシタンに入信されたとすれば、それはとてもよくわかります。私は貴方が私をではなく信仰を、心の最後の拠り所にしたとは思っておりません。貴方が縋^{すが}ったのは、殿方の世界での疑問、不条理への怒りと虚しさから自らを解放する、そのための方便としての信仰だったのです。そして貴方を苦しめた不条理^{もと}の源が太閤秀吉であるのなら、私たちの想いは一緒ですものね¹⁷⁾。

16) 秀行は家康娘の振姫を娶っており、その事情も豊臣側から見て転封の一因であったと思われる。あとの会津の地には上杉景勝が封じられた。秀行は関ヶ原の合戦では徳川側に味方し、宇都宮で上杉を牽制する重要な役割を果たし、関ヶ原の戦のあと60万石で会津の地に戻っている。徳川からは一門扱いをされて、松平姓を許されている。ただ、秀行以降の子孫は、氏郷の血筋なのか蒲柳の質(ほりゅうのしつ)で、秀行は30才で早世。そのあとを継いだ忠郷も25才で死去。4代目の忠知(忠郷の弟)は四国伊予の地に20万石で封じられたが、やはり31才で行き、残念ながら氏郷の血脈は途絶えてしまった。
なお、この時代は親子、夫婦が近くに居住することは稀であったが、氏郷の生母(おきり)は会津において氏郷と一緒に暮らしており、その墓所も会津にある。



(左) 蒲生忠郷の墓碑(会津若松市高厳寺の裏手 会津における最後の蒲生家当主で三代目)
(右) 氏郷生母(おきり)の墓所(会津若松市 大龍寺のはずれにある稲荷の一角にある)

17) 主人公は信長の次女。巷間「冬姫」という名前で知られている。しかし、のちの相応院という名前は確かであるが、実は生母も本人の実名もよく分かっていない。冬姫というのは、「永禄12年冬姫を嫁がせた」という文献に依拠していると思われるが、他に名前に言及のある資料が全くなく、当該記述も恐らく「永禄12年の冬に、娘を嫁がせた」と解するのが妥当だとする説に説得力がある(歴史読本 和田裕弘「織田信長家臣団の女性たち」より)。因みに、京都知恩寺の塔頭(たちゅう) 瑞林院には弟で信長四男の秀勝(秀吉の猶子に入り羽柴秀勝と名乗った)とともに墓があることから、秀勝の生母養親院が相応院の母でもあるとの説がある。相応院は長命で81才まで生き、寛永18年(1641年)京にて死去。法名は、相応院殿月桂涼心英誉清薫大禪定尼姉である。



羽柴秀勝墓
(京都市左京区百万遍 知恩寺瑞林院)